



建学の精神

新島学園は、「新島襄先生の人格を欽慕し、その遺風を顕彰しキリスト教精神を基本とする徳育を施し、品性高潔な、国家社会に有用な人材を育成する」ことを目的に、新島の教えを慕う人々の熱き祈りにより、新島の父祖の地である安中に設立されました。

教育の五原則

- 1 キリスト教精神を教育の基とする
- 2 一人ひとりの生徒を愛し、その人格を重んずる
- 3 知識水準を高くし、勉学の喜びを教える
- 4 勤労を尊び、天然資源の利用を学ぶ
- 5 己れを知り、国を愛し、隣人に仕え、世界を友とする心を養う



三育学院 校章・マーク
三育学院の校章は十字架と正三角形を基本とし、十字架はキリスト教のシンボルであり、三角は「知育、徳育、体育」及び「頭と心と体」の円満な発達と成長を意味しています。

学校法人 新島学園

〒379-0116 群馬県安中市安中3702

TEL : 027-382-4073 FAX : 027-382-4093



創立

新島学園創立者の湯浅正次の父 三郎は、新島襄が設立した同志社に学びました。しかし兄の一郎が画家となって家業を継がなかったために、1832年(天保3)から続く味噌・醤油製造を営む老舗 有田屋の4代目として、学業2年目で中退を余儀なくさせられます。三郎は、学業を途中で断念せざるを得なかった無念さを、折に触れて正次に語っていました。三郎は家業のかたわら、町長職や県議会議員の公職に就き、県政に寄与した人物でもありました。

1945年(昭和20)三郎の逝去に伴う六十日の法要の席で、正次は父 三郎の永眠記念事業として、この地に新島襄の精神を建学の基礎とする中学校を新設する決意を表明します。参会者一同は、その素晴らしい発想に賛同しました。

そもそも湯浅家は、三郎の父で有田屋3代目当主の治郎(1850~1932年)の時代から、キリスト教教育の重要性にはひとかたならぬ思い入れを持っていました。

正次は1945年(昭和20)11月から校地の視察に訪れるなど、着々と準備を進めます。東横野村中野谷の地主たちは賛意を表わし、村長を中心にした学園建設地買収委員会まで結成されました。ところが、1947年(昭和22)にGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)の指揮の下、農地改革が行なわれて用地が小作人に分配されることが決まると、小作人の多くが、用地の売り渡しに対して強硬な反対に回りました。これにより計画は頓挫。碓氷川の南岸に位置する日本特殊鋼・安中工場跡地が校地に選ばれ、隣地に残っていた碓氷蚕種施設組合の4棟の建物を改装して仮校舎とすることになりました。

1947年(昭和22)3月13日、文部省(当時)から財団法人新島学園及び、中学校設立の認可が下り、その後、学校法人に変更。中学校と高等学校が併設されました。



創立者 湯浅正次(1911~1999年)
新島学園設立後、5期20年間にわたって
安中市長を務めました。



創立の背景と歴史

上州・安中は、江戸時代に中山道の宿場町として栄え、その基礎は、安中藩主 板倉勝明侯によって築かれました。明治維新後には、新島襄によってキリスト教の教えがもたらされ、キリスト教精神に基づく人格教育を進める気風が根差し、「文教の町」としての風土が育まれていきました。

安中教会は、新島襄が帰国後、日本で最初に福音の種を播いた教会であり、日本人の手で創立された日本で最初の教会でもあります。1878年(明治11)3月31日の夜、〈便覧舎〉において地元の求道者30名(男子16名、女子14名)が新島襄から洗礼を受け、続いて新島の司式で「公会設立式」を執り行なったのが、安中教会の始まりです。〈便覧舎〉とは、1872年(明治5)正次の祖父治郎によって、日本で初めてつくられた私立図書館です。しばらくの間は〈便覧舎〉で礼拝が守られていましたが、1883年(明治16)碓氷会堂が建設されます。1919年(大正8)新島襄召天30年を記念して、現在の安中教会の会堂(新島襄記念会堂)が建設されました。栃木の大谷石や茨城産の大理石を使ったゴシック様式の外観を持った会堂は、古橋柳太郎によって設計されました。このとき、治郎と柏木義円(1860~1938年)牧師は、東京や名古屋、京阪神にまで広く募金を募っています。

治郎は福澤諭吉の著書を読んで教育の重要性を認識した人で、同郷の新島襄と親しく交わり、安中教会が〈便覧舎〉でスタートしたときに洗礼を受けた30人の中の一人です。1893年(明治26)には県会議長に就任して廃娼運動の先導役となりました。

後妻にきた初子は徳富蘇峰・徳富蘆花兄弟の実姉で、治郎は家業のみならず、安中小学校設立や新島が開いた同志社、義弟である徳富蘇峰の民友社を経済的に支援したほか、日本鉄道や日本組合基督教会などの理事を務め、社会・文化運動にも力を尽くしました。また、警醒社(のちに警醒社書店)を設立して、内村鑑三らの出版事業を助け、新島没後の同志社の立て直しに、理事として尽力しています。

こうした父祖を持つ正次が、キリスト教精神に基づく教育を行なう学校の設立を願うのは、ごく自然なことでした。決意表明は、父の永眠記念事業の形がとられましたが、これは正次の少年時代からの夢でもありました。旧制高崎中学在学中に、正次は安中教会内の基督教青年会の機関誌『金蘭』に新島中学校設立論を投稿しており、このときからの夢を実現したことになります。なお、開校前の一年間、仮校舎を利用してYMCA英語学校が開校され、優れた教育によって大きな結実を得たことから、この卒業生の多くが引き続き新島学園への入学を希望しました。

安中教会員で有田屋社員であった田中省三(1890~1989年)は、正次の善き助け手となりました。新島学園の設立と維持に深くかわかり、評議員としても学園の発展に尽力しています。

1947年(昭和22)に開校した新島学園の教育理念は、「伸び伸びと自由に生き、その自由の中で秩序を知り、自分を律し、自分の考えを育て、神の前・人の前にあって恥じることなく、最善の努力を惜しまないで、自分の道を切り開いていける人物を育てること」。1983年(昭和58)には、〈新島学園女子短期大学〉が高崎市昭和町に開学しています。